



フィリピンのエコツーリズムに学ぶ 持続可能な観光で自然保護と環境保全を

この四半世紀でエコツーリズムが進んだのは、とりわけアジアの、開発の手が及びきらない奥地や離島である。観光への産業転換や持続可能性の追求に、エコツアーが特に欧米からの関心を誘い、それら地域で大きく開花した。

マニラから空路約1時間、セブ港からフェリーで約2時間のフィリピン・ボホール島が代表例だ。大げさなようだがエコツアーだけで島内観光が完結してしまう。なぜならボホールには盛り場がなく、夜の観光消費といえばファイヤーフライ・ウォッチング（蛍鑑賞）ぐらいだからだ。蛍鑑賞は、アバダン川の船上から暗闇のなか行われる。流域の生息樹木は大型台風で打撃を受けたが、それでも夜ともなればクリスマスツリーのように美しい。マングローブに蛍が天然の光を放つさまは、とてもロマンチックだ。

ボホールのエコツアー人気を決定づけているのが、世界最小の霊長類・メガネザルのターシャである。4500万年も前から存在したと言われる、今では絶滅危惧種だ。手の平に乗るほどの小ささで、



ボホールを中心に生息する絶滅危惧種のターシャ

以前は観光客にも触らせていた。ところが、ストレスを感じると自殺をはかるとも言われるほど神経質なため、今では保護区が整備された。観光客は息をひそめながら、愛くるしい表情をシャッター音なしにカメラに収める。夜行性なため、昼間はじっとして見つけやすいのだ。

ほかにも、チョコレート・ヒルズとよばれる円錐形の丘の連なりをネイチャーガイドの導きでトレッキングしたり、カントリーサイドを楽しめるロボック川のリパークルーズで船上ランチを楽しんだり、ホテル以外のすべての旅行商品がエコツアーになっている。

ちなみにボホールは2003年、フィリピン初の観光経済区に指定された。1990年代後半からダイビング施設やホテルの開発が進み、環境汚染が懸念されたためである。貴重な自然資源を守るためにフィリピン政府は、特定地域の入域者に対して観光税を課すことを決めた。例えばボラカイ島では環境料を、パラワン諸島エルニドではエコツーリズム開発料を、ボホール州アンダの町では環境使用料

を徴収している。対象は外国人だけでなく、フィリピン人観光客にも課税される。

日本でエコツーリズム推進法が施行されたのは2008年のことである。環境省をはじめ国土交通省、農林水産省、文部科学省が立法に推挙した。地方創世が今、叫ばれているが、開発と環境保全の両立に



エコツーリズムは今後、ますます関心が寄せられることだろう。ボホールの事例にみるように観光が、ときとして新たな産業や雇用の創出に一役買うことを、次世代を担う若い人たちには特に、知ってもらいたい。観光振興には、宣伝広告など情報の発信が欠かせない。成熟した観光地として知られるハワイ州も、ホテル税を原資に他国への誘致活動を展開している。

観光立国を目指す我が国もまた、2020年の東京五輪・パラリンピックを見据えて、こうした税制導入や農山漁村のエコツーリズム推進に議論が深まることを期待する。それと同時に、学生の皆さんの若いチカラを、自然保護や環境保全といった持続可能な観光に活かしてもらいたい。その気づきのためにも、ぜひ一度、可愛いターシャをボホールに訪ねてみてほしい。

略歴 ちば・ちえこ 観光ジャーナリスト。

中央大学経済学部インターンシップ科目国際観光コース客員講師・横浜商科大学非常勤講師。中央大学経済学部1988年卒。1996年有限会社千葉千枝子事務所設立。著書に「観光ビジネスの新潮流」(学芸出版社)など多数。